

『東方』二九六号より

地域と中国——中央を素通りして

浅野 純一（追手門学院大学）

なるほど、こういう切り口もあるな、と思った。

九州は、一地方であるにもかかわらず、現代文学に限ってもこれだけ多彩な交流が、中国とのあいだにあったのだから。

中国の一地域と日本、たとえば上海と日本とか東北地方（満州）と日本という限定の本は、これまでもけっこう出版されているが、日本の一地域と中国という限定では、そう多くはないし、更に現代文学という限定をくわえた本は、更に少ないだろう。そういう意味で、なるほどと思った。

それは、恐らくわれわれが中国に対するときのアイデンティティーが、自分の生活する地域よりも「日本」あるいは「日本人」というカテゴリーにより依存しているからでもある。だから、本書の九州という一地域から「日本」をいわば素通りして中国に向き合うという試みは新鮮だ。

本書の構成は、以下の通り（かつこ内は執筆者）

序章	中国現代文学と九州	（岩佐昌暲）
第一章	文学者郭沫若と九州の縁	（武継平）
第二章	陶晶孫と福岡	（小崎太一）
第三章	張資平と九州・熊本——旧制五高の青春	（松岡純子）
第四章	夏衍と北九州	（新谷秀明）
第五章	上海を見ていた墓——魯迅と鎌田誠一	（横地剛）

▶ トップページにもどる

岩佐昌暲編著

『中国現代文学と九州』

新書判・二四八頁・九州大学出版会・一、三六五円



第六章 魯迅と長崎
（永末嘉孝）

第七章 「満州国」詩人矢原礼三郎と『九州芸術』

（与小田隆一）

第八章 内なる自己を照らす「故郷」

（間ふさ子）

第九章 魯迅と郭沫若——その九州大学との関係

（山田敬三）

（岩佐昌暲）

あとがき

目次をざっと眺めてみると、およそ三種類に分類できよう。

一つは、九州の高校・大学・専門学校に留学して、この地で青春を過ごした留学生について。第一章から第四章がこれに当たる。

二つ目は、魯迅と九州の関わり。第五章と第六章、およ

び第九章。

それから、中国（「満州」と台湾）と関係した九州の作家について。これは第七・八章。

創造社といえば、一九二〇年代初頭に郭沫若、張資平、郁達夫らを中心に日本で結成された文学結社であり、中国の現代文学史に西欧流の、もつといえは日本の大正教養主義的色彩を添えたドイツ風のロマン主義を実践して見せ、文学研究会と同じかそれ以上の役割を果たしたのであるが、その「受胎期」は九州、正確には博多の箱崎海岸であった（郭沫若『創造十年』）。すなわち、一九一八年の八月下旬、箱崎海岸で、岡山の六高から九州帝国大学医学部に入学してきた郭沫若と、熊本五校から夏休みをすごしにやってきた張資平が、偶然出会ったことに始まる。

本書所収の論文にことさらに新しい事実の発見があるわけではないが、こうして九州という限定を与えることで、見えてくることもある。

郭沫若と張資平の出会いが、九州で出来たこと自体は偶然であつたろうが、この二人の文学に与えた九州、すなわち福岡と熊本の影響は大きい。

たとえば、第一章で、武氏は郭沫若が海について言及する詩を挙げて、房州北条の海、六高時代の瀬戸内の海、博多湾について、それぞれのように海のイメージが変遷するかを述べ、タゴール風の穏和な海から、ゲーテ風の激しく荒れ狂う海への変遷を述べる。この変遷は、博多湾岸での台風経験がなければあり得なかったことだ、と。郭沫若のシュトルム・ウント・ドラंकは、まさに博多で獲得されたものであった。

張資平の場合は（第三章）、熊本での恋愛体験をはじめさまざまな体験を小説にしているが（「木馬」「ヨルダン川の

トップページにもどる

水」、『沖積期化石』）、筆者の松岡氏は、これを要領よくまとめ紹介している。張にとつて熊本は、「父の死に泣き、下宿の娘に慰められ、彼女への恋心を抱き破れ、神経衰弱に陥った青春の地」であつた。すなわち、その人格形成に熊本での人間関係、ひいては熊本という町が大きく影響しているということではなからうか。それは、松岡氏の引く「木馬」の冒頭部分で、熊本から東京に出てきて下宿を探す場面で主人公Cは傷つくのだが、それは「下宿の主人が、C自身がだめだと言うわけではなく、ただ中国人はだめだと言ったからである」と記すところからも、張資平の熊本への思いが窺えよう（余談ではあるが、評者は前世紀九〇年代に、前任地金沢で似たような話を聞いたことがある。中国人ではなく、韓国人であつたが）。

張資平の邦訳は多くない。本書の引用はすべて松岡氏の手になるものであること、言い添えておかなければならない。

魯迅は、彼らに先立つこと十余年前、仙台で医学を学んでいた。よく知られているように、日露戦争中の中国人捕虜とその見物人の中国人というスライドを見て、彼は医学を棄て文学の道歩むことになるのだが（とはいえ、東京でその道に挫折し、帰国後は教員、ついで役人となり、文学に本格的に参与するのはかなり後であつてみれば、それがどれほどの決意であつたか、やや疑問ではあるが）、彼の筆になる仙台の描写は、ない。いわゆるスライド事件にしろ、藤野先生にしろ、それは仙台という地方とかかわるものではなく、「日本」にかかわるものであつた。魯迅にとつて、仙台は東京と同様、「日本」として対象化されたその一部に過ぎない。

魯迅と、郭沫若や張資平と、文学者としての資質の優

劣、あるいはその作品の優劣をここで取りざたするのは、たぶんたいして意味はないだろう。

郭沫若や張資平にとつて、九州、それぞれ博多と熊本は、「日本」に収斂されない独自の土地であつたのだ。

これは、おなじく創造社の同人となる郁達夫とも違っている。その著作『沈倫』の舞台は、間違いなく名古屋であるが、郁達夫が対峙していたのは、一地方である名古屋ではなく、間違いなく「日本」であつた。しかもその程度は、魯迅よりも強い。

では、郭沫若と張資平が、魯迅や郁達夫に比べてより日本の多様性に敏感であつたのだろうか。それとも、九州という土地に、あるいは博多と熊本に、他の地域と異なるなにかがあつたのだろうか。

評者としては、いささか乱暴な議論ではあるが、ここに中国に対する、あるいはもつと敷衍してアジアに対する九州の親和性を読みとりたいところである。

しかし陶晶孫にとつては、福岡は東京から「流れて来」た地でしかなかった(第二章)。陶晶孫は、父の留学にしたがつて一九〇六年、九歳のとき来日し、東京で成長した。日本語はほぼ母語であり、ピアノとチェロに秀でていた。流行りのことばで言えば文化資本家である。『木屋』を紹介する小崎氏が「この作品を読んで思うことは、それが全然中国を感じさせないということである」というように、彼の作品は(ボーダーレスというより)日本文学と考えた方がいいかもしれない。つまり、陶が福岡(九州)をとらえる目は、中国人というより東京人のそれであつた、東京対田舎という図式でとらえたものであつた。

だから、田舎とも都市ともつかない望まない地へ「流れて来」たことによる屈折が、『木屋』『黒衣の男』など独自

トップページにもどる

の風格を生み出したのは、小崎氏の指摘通りであろう。また、『黒衣の男』について、『サロメ』のプロットとの類似性についての小崎氏の指摘は興味深い。

あまり知られていないが、夏衍もまた九州に留学していた一人であるが(第四章)、創造社の人々よりやや遅れていた。したがって彼らと交わることはなかった。留学先が福岡ではなく北九州だったことと、帝国大学を頂点とする官立学校ではなかったこともその理由であろう。この章で注目されるのは、夏衍自身の動向もさることながら、彼の入学した私立明治専門学校(現在は国立大学法人九州工業大学)の存在であろう。その創設者安川敬一郎は、九州の炭坑王であり、黒田藩士の息子であり、玄洋社の頭山満を通して孫文とも知り合いであつたという。玄洋社といい宮崎兄弟といい、九州は辛亥革命以前から、中国と特別な関係があつたことを想起させる。夏衍が、学校支給の旅行費で、朝鮮から東北地方を経て中国縦断の旅をしたこと、この旅行が後の人生に与えた影響も考え合わせると、これもまた九州ならではの縁であつた。

第五章は、上海内山書店の店員で魯迅の信頼あつた佐賀県出身の鎌田誠一の紹介、第六章は長崎行きをめぐって晩年の魯迅の動向を論じたものである。それぞれ興味深いエピソードが紹介されていておもしろい。

また第七章は、一九三四年に創刊された『九州芸術』という雑誌に一瞬かかわつた「満州国」の詩人、臧克家と親交のあつた矢原礼三郎に関する考察であるが、本章はほんの緒論で、今後の調査研究が期待される。

第八章は、八代市出身の作家坂口繻子と台湾の関わりを論じたものである。

第九章は、魯迅を九州大学に招聘するという計画があつ

▼『東方』296号より

四 地域と中国——中央を素通りして

▲ 浅野 純一

た、というエピソードの紹介である。

『中国現代文学と九州』という本書の書名からすれば、第七・八章はいささかもとるものがあるのは否めないだろう。編者もそこは重々承知の上で本書を編んだことではあろうが、また間氏の論考など、なかなか興味深いものであることはそのとおりだが、評者としてはいささか手を拱かざるを得ないところではあった。

編者もあとがきで述べるように、本書が「九州と中国（ひいては九州とアジア）の歴史的関連を考えるきっかけとなる」ことを、共に期すものである。

トップページにもどる

▲ 東方書店